

韓国立正佼成会にみる日本的要素の持続と変容

——現地化への取り組み

渡 辺 雅 子

はじめに

立正佼成会（以下、佼成会）は、一九三八（昭和一三）年に霊友会から分派して成立した教団で、庭野日敬（二九〇六—一九九九）を開祖、長沼妙佼（一八八九—一九五七）を脇祖とし、法華経による双系の先祖供養と心の切り替えによって運命を転換し、人格完成することを目的とする新宗教である。

佼成会では一九七九年に韓国ソウルに「連絡所」という拠点を設置し、布教に着手した。一九八二年に連絡所から教会に昇格した。日本の宗教団体が韓国で法人格をとることが難しく、一九九七年に在家仏教韓国立正佼成会として任意団体登録して独立自主団体となり、一九九八年に日本の佼成会と姉妹結縁した。姉妹団体というのも、韓国佼成会は日本の本部と密接な関係のもとに布教を展開させている。信者は一〇〇%現地韓国人であり、異文化布教で一定程度の成果をあげている。韓国佼成会の展開においては、元在日韓国人である、李一家の役割が大きい。その展開過程についての詳細は、拙稿「韓国における立正佼成会の展開過程——日本宗教であること

韓国立正佼成会にみる日本的要素の持続と変容

の困難と在日韓国人による現地韓国人布教」「渡辺二〇〇五」を参照していただきたいが、日本派遣の教会長時代をへて、一九八六年から佼成会本部によって「現地人による現地人布教」という方針が出された。同年、日本生まれの在日韓国人である李福順（一九三六年生、佼成会の選名は京子）が支部長に任命され、草創期から韓国佼成会にかかわってきた娘の李幸子（一九五八年生）と二人三脚で布教を展開してきた。李福順は二〇〇二年に教会長、李幸子は事務全般を取り扱う総務部長になり、二〇〇九年一月に福順は教会長を退き、幸子が教会長に就任した。

二〇〇〇年の海外教会長・拠点長会議に韓国佼成会側が提出したペーパーでは、今後の布教課題として、次期リーダー育成、壮年部、婦人部教育、布教体制の確立などが挙げられた後に、反日感情が根強く残っている韓国で、佼成会の教えはいくら仏教の教えであるといっても布教に困難があること、民族性の濃い仏教文化の中で、佼成会が在家仏教、現代仏教、生活仏教とアピールするのは容易でないことに言及している。さらに、韓国佼成会はこれまでは日本の佼成会をコピーしてきたが、今度の課題は韓国仏教文化と出合い、何を誕生させていくかが課題であると述べられている。

日本にルーツをもつ宗教運動が、韓国という異文化で布教を展開していくためには、いくつかのことを解決していかなければならない。それは適応課題とよぶことができるもので、ホスト社会や文化との葛藤を解決しながら、いかにして孤立せず、またその中に埋没せず、自らの宗教運動としての独自性を保持しつつ韓国という異文化社会に適応していくかという課題である。¹ 韓国の場合、それには、①言葉の壁の克服、②現地の祈祷・祈願信仰への対応、③教義・儀礼・実践の異質性の稀釈、④仏教、キリスト教、シャーマニズム（巫俗）との摩擦の回

避、⑤社会的認知の獲得があるが、これらに加えて韓国独自のものとして、⑥反日感情への対応（日本性、ことに植民地支配を想起させるようなものの回避）という課題がある。

韓国校成会の場合、信者は全員韓国人であり、すべて韓国語が使われている。言葉の壁の克服については、日本語と韓国語の両語に精通した李幸子という存在が大きい。また、李福順も苦勞の末、現在では韓国語に不自由はなくなっている。本稿では、適応課題群のうち教義・儀礼・実践の異質性の稀積に関する課題と反日感情への対応について、主にみていくことにする。

第一章では、日本の植民地支配に起因する反日感情の存在にかかわる日本性の稀積の問題と現地様式の取り入れの様相について、第二章では、校成会の教えと実践の中核部分を占める先祖供養が韓国の宗教文化と葛藤する様子やそれへの現実的状況適合的対応のあり方について言及する。第三章では、韓国人信者からみた文化的違和感の所在を検討し、かつ二〇〇七年三月に完成した教会のリフォーム（増改築）後の変化について述べる。文化的異質性の稀積、現地様式の取り入れという、韓国で受容しやすくする試みとともに、どうしても変えることのできないものの場合、そのやり方を変容させることによって、内実を持続させるという試みもみられる。なお、第一章と第二章は、日本生まれの元在日韓国人であり、日本と韓国の双方の文化に精通し、かつ韓国校成会の中心を担っている李福順と李幸子からの聞き取りを主体に構成し、第三章は、生まれも育ちも韓国である生粋の韓国人からの聞き取りに基づいている。

一 文化的異質性の稀釈

韓国と日本との関係は歴史的に規定されており、韓国佼成会の展開の歴史をみても、「日本の宗教であることの困難」があった〔渡辺二〇〇五〕。韓国佼成会が仏教系であることは布教にあたって有利な条件であるが、まず意識的に行ったことは、日本性の稀釈である。文化的異質性の稀釈には、韓国の場合、反日感情の存在とかわる日本性の稀釈と現地様式の取り入れの二つの側面がある。

1 日本性の稀釈

韓国と日本との関係では、古くは豊臣秀吉の朝鮮出兵、そして「日帝時代」と呼ばれる一九一〇年の韓国併合から一九四五年の日本の敗戦に至るまでの三六年間にわたる日本の植民地支配というマイナスな出来事がある。ことに後者は韓国側にとっては、恨（ハン）に満ちた屈辱の時代だった。「内鮮一体」という同化政策のもと、母国語の禁止と日本語使用の強制、創氏改名が実施された。京城（ソウル）の南山頂上近くに建てられた朝鮮神宮をはじめとして、各地の都市や地域に大小さまざまな神社が建立され、皇民化政策の一環として、参拝が強要された〔伊藤一九八五：二六〕。こうした背景のもと、反日感情を引き起こさないよう韓国佼成会では日本性の稀釈が行われた。

まず第一に、佼成会が所与の経典とする法華経の経典は韓国に拠点ができた時に、東国大学教授による翻訳経

典がすでに準備されていた。これは一年ほどしか使わず、その後書店で見つけた韓国の僧侶が書いたハンゲルの法華三部経を用いている。法華三部経は韓国にもある著名な経典なので、この点で違和感を減少させている。また、「南無妙法蓮華経」の題目も「ナムミョウボツプヨンフアーギョン」と韓国語読みである。

第二に、経典から日本由来の菩薩や神名を除去した。佼成会の青経巻といわれる経典には、法華三部経に入る前の「勧請」の部分で、日蓮大菩薩、八幡大菩薩、七面大明神といった日本由来の菩薩や神々が勧請される。日蓮大菩薩は日蓮宗の開祖、八幡大菩薩は豊臣秀吉の朝鮮侵略の際に掲げられた旗に書かれていた神名である。七面大明神とは、身延山地にある七面山に祀られている日蓮宗の守護神である。韓国ではこれらは除かれ、佼成会の開祖、脇祖にちなむ「庭野家御守護尊神」、「長沼家御守護尊神」という部分も削除されている。

第三に、日本に由来する神仏や人物の「命日」の名称を韓国人が受け入れやすいように変更したり、削除した。佼成会という命日とは、寺院でいう縁日にあたる意味があり、教会に参拝する特別の日とされている。二〇〇七年三月以前は、韓国佼成会の命日は、毎月一日（初命日）、四日（開祖命日）、五日（虚空蔵菩薩命日）、一〇日（観世音菩薩命日）、一五日（釈迦牟尼仏命日）、一八日（葉王菩薩命日、韓国に大本尊が入った日）、二八日（教会命日）だった。かつて日本の本部では五日、一〇日、一四日、一五日、二八日が命日であった。一〇日は日本では「脇祖命日」であるが、「観世音菩薩命日」に名称を変えた。一四日の「七面大明神命日」は、日本由来の神々なので、韓国では削除した。二八日の「八幡大菩薩命日」は、八幡大菩薩は前述のとおり、韓国では使うことができないので、二八日は「教会命日」という名称で行った。韓国教会にとっての記念日である一八日は韓国でポピュラーな「葉王菩薩命日」とした。このように、命日の由来を日本的なものから、韓国人にとって受け入れや



写真1 教会道場の様子 (2004年)

式典での供養。宝前に向かって左に庭野日敬の写真、右に長沼妙俊の写真が掲げている。天井に下げているのは花祭りの提灯



写真3 開祖庭野日敬の写真
写真の下には韓国語の「会員綱領」



写真2 脇祖長沼妙俊の写真
日本の着物を洋服に変更。写真の下には韓国語の「三婦依」

すい名称に変更した。

第四に、日本の佼成会の教会には、教団の創設者である庭野日敬と長沼妙佼の写真が「ご宝前」(仏壇)の左右に飾られている(写真1、2、3参照)。妙佼の写真は日本式の着物を着ているので、日本統治時代を思い起こさせる。かつては庭野日敬の写真のみを掲げ、長沼妙佼の写真は仏壇の中に入れていたが、一九八七年に新道場ができたのをきっかけに、日本の着物を洋服に変えた絵を描いてもらい、それを写真にとって掲げるようになった。

第五に、宝前のあり方についてである。初期には曼荼羅といって掛け軸の本尊だったが違和感があるので、仏像にした。また、日本のおいがないように、飯水茶の下に日本式の受け皿を置かないようにした。仏具は韓国の伝統仏教でつかう真鍮の仏具を用いた。また、韓国では生米をあげるので、真鍮の入れ物に米を入れて供えるなど、宝前の見た感じの日本性を稀釈して、伝統仏教方式を採用できるところは採用している(写真4、5参照)。

なお、日本性の稀釈がかなわず、韓国で受け入れることが難しいものに、守護神(「御守護尊神」)がある。これは、礼拝対象物に関することなので、現地で変えることはできない。本尊については、日本の本部の儀式課で検討した上で、現在、アジア地域は金の仏像になっている。しかし、その上位の守護神の形式については、まだ手がつけられていない。守護神は神社形式で、神体として鏡が入っているので、日帝統治下の神社を連想させる(写真6参照)。韓国佼成会では、守護神はよほどでないと祀ることは難しいと考えており、積極的にはすすめていない。²⁾



写真4 韓国連絡所時代の宝前（1979年）

当時の大本尊は曼荼羅。飯水茶の下には日本式の受け皿があり、手前には神道風の三方がある。左の額入り写真は朴正熙大統領。右側には庭野日敬の写真がある



写真5 仏像の大本尊と新しい方式の宝前（2004年）

飯水茶の下には日本式の受け皿はなく、
手前に韓国の真鍮の入れ物に生米が盛られている

2 現地様式の取り入れと変容

韓国校成会では、伝統仏教で行っていることを取り入れている。

①毎日の教会での供養の前に、会歌とともに、伝統仏教で共通に歌う仏讃歌を歌う。②韓国の寺では、説法を聞きに行く習慣があり、信者は何かよい話を聞きたいという気持があるので、命日に教学の講義を入れる。③伝統仏教では、参拝者に昼食を出すので、それにならって昼食を出す。④涅槃会（二月一五日）、釈尊降誕会（四

韓国立正校成会にみる日本的要素の持続と変容



写真6 教会長李家の宝前
右手の短冊状のものは総戒名、左手は宅地因縁。
中央は本尊（金色）、その下右手にある
神社風のもの、守護神

月八日)、成道会(一二月八日)と盂蘭盆会(七月一五日)は、もともと佼成会でも行う行事であるが、新暦ではなく、伝統仏教に合わせて旧暦で行う。⑤ 釈尊降誕会(旧四月八日)は花祭りともいい、伝統仏教では盛大に祝われ、その際、提灯が奉納される。^③ 佼成会でも信者からの発案で布教初期から花祭りの提灯を天井につるしている(写真1参照)。佼成会でも花祭りは最大の行事である。⑥ 盂蘭盆会では、お盛りものはビビンバなど韓国^④の食べ物を与える。⑦ 冬至(旧一二月二〇日)の時に、韓国の習慣で、伝統仏教ではカレンダーを配るので、佼成会でも一九九四年からカレンダーを作成し配るようになった(七〇〇部)。⑧ 韓国は全国統一試験での大学入試が行われるが、伝統仏教では受験生のための一〇〇日祈願と全国統一入試が実施される日に祈願供養を行っている。佼成会でも信者の要望で、二〇〇二年から入試の祈願供養を開始した。なお、佼成会では、申し込みのあった受験生の名前を戒名室にかけておき、受験当日には受験生の名前を読み上げて祈願する。⑨ 厄払い祈願供養の実施。サムジェといい、立春の日かその前日に、該当する干支の人の厄払いをする。厄年に当たる人は寺に行つて布施をしたり、韓国のシャーマンであるムーダンの所に行つて厄払いをしてもらう。厄は三年間続く。⑩ 焼きあげ供養の実施。伝統仏教で行っているもので、仏具、お札などの処理をするために焼きあげをする。伝統仏教ではこのようにやっているが、なぜ佼成会ではないのかという信者からの声や、伝統仏教の寺ではこうやっているから、韓国佼成会にも取り入れたらどうかという提案を、吟味して取り入れている。

二 倭成会式先祖供養と韓国の宗教文化との葛藤

倭成会が韓国に布教していくにあたって、漢字文化、仏教文化、先祖を敬う儒教文化は、文化的連続性といった点でメリットであったが、反面、日本からきた仏教団体であるということはデメリットであり、かつ倭成会の特徴の、在家仏教、現代仏教であることは、理解させることが難しかった。

韓国の仏教の場合、一般的には寺は山奥にある。倭成会が寺ならば、なぜ寺が町中にあるのか。伝統仏教の寺では、伽藍があつて二四時間お詣りができる。倭成会は何時にあげて何時にしめるというのが決まっている。寺には出家僧がいるが、倭成会にはいない。⁵⁾儀式・儀礼を僧侶ではなく、一般の生活している人がやるのでおかし*い*と感じる。伝統仏教の寺では、毎月一日、一五日は参詣日で、僧侶の説法を聞いて、それから寺院で出された昼食を食べて帰る。その時持つて行くのが米と蠟燭と布施である。倭成会では命日も多く、法座での修行も強調されるので、行く回数が多い。なぜこんなに頻繁に寺（倭成会）に行くのかということも聞かれる。倭成会が仏教系であることは韓国人に受容を促進するプラスの要因ではあるが、伝統仏教と比較した場合、倭成会では教会を参詣の場としてばかりではなく、生活実践のためのトレーニング場として位置づけていることにも相違点がある。

これまでみてきたように、韓国倭成会では伝統仏教で行われていることを選択的に受容し、かつ「日本からの宗教であること」で反日感情を刺激しないよう、日本的なもの、とくに日帝支配時代のことを思い出させるよう

な要素は極力排除している。しかしながら、佼成会の教えの根本にかかわるものについては、その基本を変容させることはできない。その場合、韓国人信者を説得、納得させなければならず、実質をとりながら、状況適合的に変容させているものがある。

1 佼成会の先祖供養を理解させることの難しさ

在家仏教であることは、佼成会の信仰の根幹にかかわるものである。その基本にあるのは、自らの手で自らの先祖を供養するという先祖供養に関するものである。韓国の宗教状況については、伝統的には儒教、仏教、シャーマニズムがあり、それに加えて、近年キリスト教が大幅に躍進している状況がある。韓国は儒教の国で、祖先祭祀が重要視されるため、佼成会の先祖供養も受け入れやすいかと思われたが、実は理解させるのに難しいことの一つが、佼成会の実践の基本にある先祖供養であった。

2 総戒名の祀りこみの困難とその理由

日本では、佼成会に入会するとまず、総戒名を祀りこむ。これに合掌礼拝して朝晩供養（誦経）をすることが修行として欠かせないものとされる。佼成会の先祖供養の特徴は、イエ的単系的先祖ではなく、双系的先祖である。総戒名とは、夫方（父方）、妻方（母方）の両家の先祖すべてを象徴する礼拝対象で、日本では「諦生院法道慈善施先祖○○家 徳起菩提心」と書かれており、右の○○家の箇所に夫方（父方）の姓を、左には妻方（母方）の姓を書く。韓国では、結婚後も姓は変わらないので、本貫（氏族発祥の地）と姓を四つ並べて書く。たと



写真7 総戒名

えば、写真7に示すように、右より古阜李（父の父）、濟州高（父の母）、慶州李（母の父）、金海金（母の母）と四つが記入される。古阜、濟州、慶州、金海は本貫である。

また、総戒名の祀りこみとともに、三代までの先祖（六親眷族）の名前を集めて、倭成会式に戒名をおくり、過去帳に

記載して供養するというのも倭成会の先祖供養の基本である。

日本では総戒名の自宅への祀りこみをもって会員となる（家族の反対があつて、祀りこみができない場合は、導きの親が預かる場合がある）。しかしながら、韓国の場合は、総戒名を自宅に祀ることに大きな抵抗がある。

その理由として挙げられるのは、第一に、韓国では儒教による祖先祭祀を大切にすることが、仏壇に相当するものではなく、家に先祖や神を祀る習慣はない。韓国では儒教式の祖先祭祀（チュエサ）は長男の家で行われ、チバン（紙榜、紙の位牌）を書いて祭壇を作つて供養し、法事が終わったあとでそれを燃やして片づける。したがって、先祖の位牌を残して祀るといふ習慣がない。祭祀の趣旨は祖霊（死者）を招いて飲食を提供することであり、死者は忌日に子孫のところを訪れ、食事の接待を受けて再び帰っていくと考えられている。「伊藤一九九六・二四一―二四二」。寺やムードン（韓国のシャーマン）の所では、お金を出して供養してもらうが、自宅で祀る習慣がない。

そこで、なぜ形として祀らなくてはいけないのか、まして長男が祭祀をしているのに、なぜ自分がしなくてはならないのかという問いが出る。

第二に、鬼神に対する恐れがある。自宅に先祖の霊を祀ると、魔が入る、鬼神が入る、鬼神を呼び寄せて祟りがあったらどうするかと恐れるのである。今までやってきていないのに、放っておいたらよいのに、なぜ静かに眠っている霊を呼び起こすのか。家にそのようなものを祀ると祟りがあるので怖い。また、なくす時も怖いというのである。

儒教式では、子どもを残した男子という、一定の資格をもった者だけが神になる。また、儒教の祭祀者の特徴は、徹底した男性中心の集団であり、徹底した直系主義による長子・孫中心であり、宗孫を基準に祭祀の祭神が限定される。宗孫の四代祖までは忌祭の対象、五代祖以上は墓祭の対象となる「崔一九九二・一一五」。儒教の祭祀の場合、原則的に男性のみが参加を許されており、父系親族・血族によって行われる。儒教は倫理や社会制度の面で定着したが、巫俗信仰（韓国シャーマニズム）の影響は色濃く残っている。このような儒教の祭祀対象にもれた人々は雑鬼となる。雑鬼になるのは、不幸な生涯を送った人（父母より先に死んだ子ども、未婚で死んだ靈魂、幼くて死んだ早死者など。特に未婚者は怨念が強いと観念されている）、不幸な事故による死者、血族がなくて祭祀を受けられない存在、である。このような雑鬼たちは、「道中天」に浮遊する鬼神であり、血縁・地縁関係にある人に憑く。特に、血縁関係を重視するために、血縁にある雑鬼が恐ろしい存在である。こうした雑鬼は怨恨が強く、人間を病死させやすいとされている。家の外にいる雑鬼が人に憑いたりしないよう、家の中に入れないようにしなければならぬとらえられているのである。いったん憑いた場合には、呪術的な儀礼でお



写真8 ムーダンの家の祭壇



写真9 ムーダンの家には旗が立っている

どかしたり、楽しく遊ぶようにして送るとか、とにかく鬼神の接近をさえぎらなくてはならないのである。「崔一九八四・三〇八―三一六、崔一九九二・二八六」

このような文化的背景のもと、自宅に総戒名を安置することが忌避されるのである。また、佼成会では入会とともに、三代までの戒名を集めるが、その際にも、なぜ静かに眠っている霊を呼び起こすのか、黙っている先祖を一々呼び起こして、家の中がゴタゴタするのではないかという人もいる。このように巫俗信仰とむすびついて、鬼神についての恐れがある。

第三に、個人宅に総戒名（短冊状の紙）を祀ることは、真鍮の線香立て、蠟燭立てといった仏具を置き、祭壇を作ることにもなるので、それはムーダンの祭壇を連想させ、人から霊をつかって何かをしているかのように思われるため、抵抗がある（写真8参照）。人々は困ったことがあった時にはムーダンのもとを訪れるが、ムーダンは蔑視されているところもあり、その社会的地位は低い。

このように、韓国には仏壇がなく、家に安置する習慣がない。家の中に先祖を祀るといって、鬼神、すなわち魔が入るということで、なかなか安置できないのである。

3 総戒名の戒名室への安置という「方便」

個人宅に総戒名を祀ることの抵抗感を減じる方策として、韓国佼成会では教会にある戒名室で個人宅の総戒名を預かるという方法をとっている（写真10参照）。戒名室とは、戒名をつけたり、追善供養等をする部屋である。そこには引き出しのある箱があり、各自の総戒名はそこに封筒に入れて納められており、追善供養や総供養の時



写真10 戒名室

右上のだるまの下にある引き出しに総戒名が納められている

は出して供養する。これは韓国独自のやり方である。自宅に安置することは難しいが、総戒名を祀りこんで、戒名室に安置するということは受け入れられるようになった。

先祖を祀ったら家の中がゴタゴタするのはないかという問いに対して、教会長は「なぜ私たちの先祖が鬼神なのか、自分が死んだら先祖になるが、鬼神とか悪魔とか言われたら納得するのか。家の中に先祖を祀ったら魔が入るといふなら、なぜチェサをやるのか。佼成会では霊（鬼神）が来たら、単にそれを放りだすのではなく、ご供養し、感謝の気持ちで、安らかにすることによって成仏させ、守護霊と変えることができる」と説いている。総戒名の祀りこみをするように説得するには、まず祀った人が受けた功德を説く。たとえば酒で亡くなった人の戒名を出して追善供養を



写真11 ソウル市内の曹溪宗の寺
亡くなった人の写真やチパンを祀っている部屋がある

したら、酒飲みの夫が酒を飲まなくなったという現証を得た事例など実際にあったポジティブな事例を話す。祀ったら結果が出るという方便をつかうので、戒名室に総戒名を祀りこむのは割合と早いという。

伝統仏教の寺院には亡くなった人の写真やチパンを祀っている部屋があるので、その感覚の延長で戒名室はとらえられているようだ(写真11参照)。韓国佼成会では、自宅に祀りこみをしている数を一〇〇世帯程度と推測している。自宅に総戒名を祀りこんでいないと幹部になれないので、支部長、主任、組長、班長といった「お役」をもつ幹部は祀りこみをしている。当然のことながら、総戒名は本来なら自宅に祀ったほうがよく、戒名室はたとえいうと老人ホームのようなもので、子孫が毎日供養して食べ物あげるのとは異なるという。

4 父系血縁社会での双系の先祖供養の説得

倭成会の先祖供養には、韓国の伝統とは異なる意味が含まれている。総戒名に夫方（父方）妻方（母方）双方の先祖を祀る倭成会の先祖供養は、父系血縁を基本とする韓国社会とは異質のものを含んでいる。韓国では、個人は原則としてすべて出生と同時に父親の姓を名乗り、その親族集団への帰属が生涯にわたって社会生活全般に及ぶ個人の最も基本的な資格になっている。「伊藤一九八五…二六」。女性が結婚後も婚家の姓に入ることができないのもこの理由による。父系の紐帯は、チバン（家内の意）・門中というかたちで組織化され、四代までの祖先の祀りには、それぞれの命日を祀る忌祭祀と、正月や八月一五日の秋夕にその祖先の長男系のクンチプ（大家）に子孫が集まって、飯・汁・酒や、肉・魚・果物・餅・菓子など山盛りの供物を供え、一同礼拝する儀式がある。チバン関係にある人は年一〇数回の儀礼をとにもする。（四代奉祀の期間をすぎると不遷位⁶以外の通常の祖先は、家内では祀られず、墓祀りだけになる。）「伊藤一九八五…二四―二五」

倭成会の双系の先祖供養については、次のような説明をする。子どもは父親の血ばかりでなく、母親の血もつながっている。それは科学的にも説明されている。韓国の風習では長男がその家の先祖を祀るので、自分たちは次男、三男で、長男が先祖の祭祀をしており、命日には（チェサに）長男の家に行って祭祀に参加しているので、しなくてよいという人には、「それは儒教のしきたりだが、倭成会でいう先祖供養はお経をあげて先祖の成仏を願うのであるから、子どもの誰がやってもかまわない。息子でも娘でも、これは親孝行をする方法の一つである」と述べる。女性の中には、実家の母の供養をしたかった、実家も一緒に供養してもらえのがあるがたいと言う

人もいる。

佼成会という先祖供養が説得性をもつ背景には、韓国社会の変化がある。以前は長男が財産を一括相続して、長男が親の面倒をみ、扶養することになっていたが、今は財産を子ども間で分配することになった。また、韓国社会においては、核家族化、少子化、未婚者の増加、子どもが女子ばかりで男子がいないう家族、長男が跡をとらない、そして、長男がキリスト教の信者になったので、法事や命日の供養といった祖先祭祀をしなくなった、長男がアメリカに行っているなど、家族をめぐる変化がある。こうしたここ一〇年ほどの間に起きた時代の変化の中で、佼成会の先祖供養が受け入れられる素地が拡大した。

5 佼成会式戒名おくりと過去帳への記載

総戒名の祀りこみとともに、三代までの先祖の名前を集めて佼成会式に戒名をおくり、過去帳に記載する。戒名は、現在では各支部の戒名担当の主任がつける。入会して総戒名を祀りこみ、三代目の先祖をだす時は戸籍をとってきてもらうことにしているという。戸籍には漢字で祖先の名前と本貫（祖先の発祥地）が記載されており、命日も書いてある。それと族譜⁷がある。こうした過程で、先祖がどのような人であったか、どのような因縁を抱えているのがわかる。

外国人の場合は、戒名だけ見ても誰の戒名かわかるものにしたほうがよいとのことで、韓国の場合、名前を入れこんだ戒名をつけている。たとえば、李幸子ならば、生院徳の戒名に名前を間に入れて、「李生院妙幸子徳信女」となる。男性の場合は、妙の代わりに法、信女の代わりに信士と書く。したがって戒名室の担当の人は俗名だけ

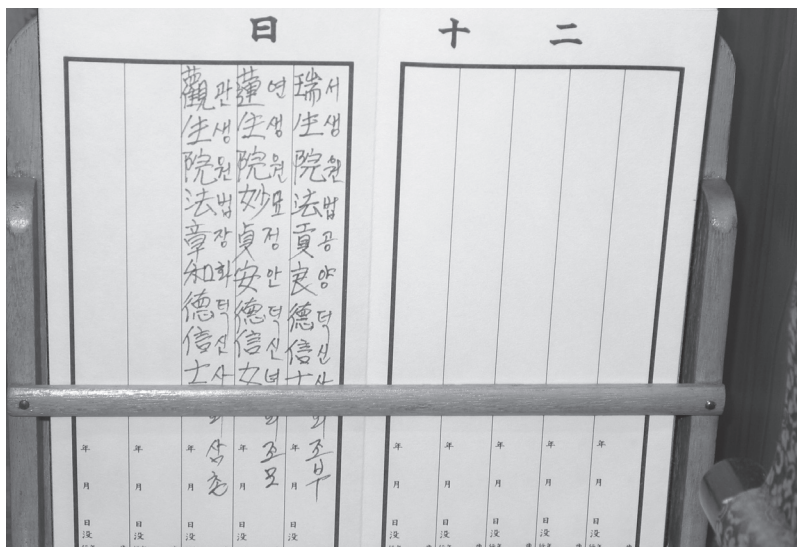


写真12 過去帳

漢字の戒名にハングルでふりがながふってある

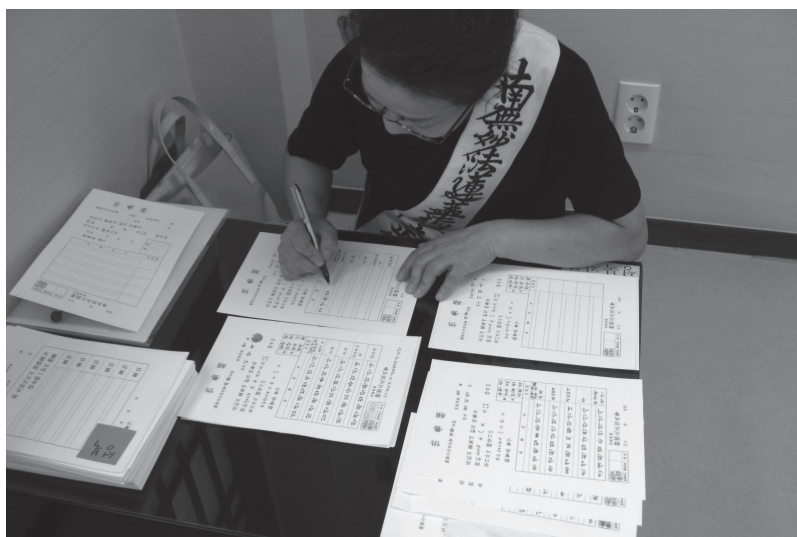


写真13 戒名当番

供養願の用紙にハングルで戒名を書いている

はつきりしたら、俗名をもって戒名をつけることができる。その横にハンゲルで読み方をふる(写真12、13参照)。韓国の儒教式の位牌というのは、チバン(紙榜)という紙の位牌で、「李幸子神位」と書く。供養が終わったら焼いてしまう。神というのは霊という意味である。儒教で一年に一回、その人が死んだ命日に集まる。今日では亡くなった人の写真を置いたりするが、佼成会のように過去帳に記入することはない。

6 追善供養と総供養

韓国では先祖供養というより、先祖を敬う祖先祭祀である。佼成会では、宝前のある家(総戒名が祀りこまれている家、本尊のある家)の場合は自宅で行う(写真14、15参照)。しかし、それ以外は戒名室で追善供養、総供養が行われている。総戒名を祀りこんだ時は、総供養を一度は行う。

追善供養や総供養をやる動機は亡くなった親に対して親孝行をしたいという理由や、現実の問題の中で、同じ問題を苦しんだ先祖が明らかになり、その供養をする場合がある。たとえば「子どもでみせられる」という言葉があるが、成仏していない先祖の苦しみが子どもをとおして示されることがあるとされる。たとえば、子どもが喘息で苦しんでいる時、「先祖の中で喘息で亡くなった人はいるか」と問い、「おじいさんが喘息で亡くなった」といった場合、その追善供養をする。子どもが大病になった場合、三代前までの先祖をさがしていくと必ず同様の病気で苦しんだ先祖が出てくるという。追善供養を家で自分でやる人もいれば、佼成会でやることを希望する人もいる。

佼成会でやる時には、お膳のお盛りものを簡素にし、なるべく負担にならないようにして行う。教会の厨房を

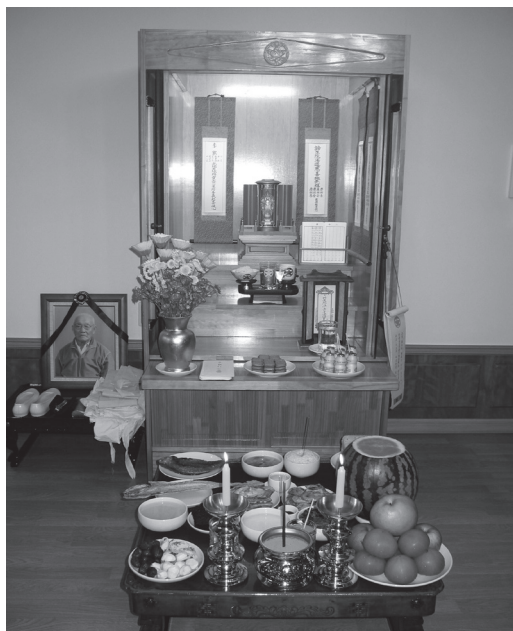


写真14 個人宅の宝前での
故人の供養のための
お盛りもの

左側の故人の写真の前には
靴とメガネがある。宝前の
右手、過去帳の下にあるの
はチパンに佼成会式の戒名
が記入してある



写真15 個人宅での故人の二十一日の供養



写真16 戒名室での追善供養

借りてそこでお膳にあげるものを作る。「供養の時も自分たちが買物をして真心で作り上げなければならぬ」という。飯と汁、酒、餅、ナムル、魚一匹、果物、花である。菓子は自由にしている。韓国式ではナムルでも五種類、果物でも五種類準備するが、佼成会では簡素にするようにしている。追善供養は、戒名を読んで供養をする。四〇分から一時間かかる。頼んだ人も一緒にお経をあげ供養する。総供養とは、特定の一人の故人ではなく、複数の先祖の供養をするので、一時間以上かかる。なお、追善供養も総供養も日本でもやっているが、戒名室でやるのは韓国独自である（写真16参照）。

これまでみてきたように、佼成会式の先祖供養、とりわけその基本である総戒名の祀りこみは、韓国の宗教文化との関係で難しく、かといってこれはゆずることのできない、佼成会の教え、宗教実践の根幹にかかわるので、説得と受容しやすいような独自の工夫が行われた。そして近年の少子化、未婚化、キリスト教への改宗者の増加

といった韓国社会の変化が、倭成会式の双系の先祖供養の受容の追い風になっていることを示した。次章では、韓国人信者の側からの外来宗教である倭成会についての違和感についてみていきたい。

三 韓国人信者からみた文化的違和感とその理解

韓国人信者は、日本から来た宗教である倭成会についてどのような違和感をもっているのだろうか。二〇〇七年八月に教会道場で行なった大法座でのインタビュー、および金美慶支部長宅での一四人の会員からのインタビュー、および二〇〇八年二月に行った文書部長兼支部長の成淑姫からのインタビューをもとに、彼女たちの意見をみていくことにする。なお、この中にはごく少数新入会員も含まれているが、ほとんどが幹部（支部長、主任、組長）である。

1 日本から来た宗教であること

「日本からの宗教だということで、人を連れて来にくいことがある」、「日本からの宗教というより、法華経はインドから来た。倭成会の法華経は人を変えますといった言い方をする」といったように、「日本の宗教であること」を前面に出すことはしにくいようである。なお、「入会した後、日本の宗教だとわかった。心の中では日本は韓国を侵略したと思っていたが、倭成会の教えを聞いてから、そういう気持ちがなくなった」と述べている人もいる。

(1) 開祖、脇祖の写真への違和感

日本からの宗教であることを言わなくても、道場に入ると日本のおいがある。まず、抵抗を感じるの、開祖庭野日敬と脇祖長沼妙佼の写真である。この写真は前述したように、妙佼には日本の着物ではなく、洋服を着せたものである。宝前に向かって左に庭野日敬、右に長沼妙佼の写真を置いていた⁽⁸⁾(前掲の写真1、2、3参照)。「最初は開祖さま、妙佼先生の写真があったので、自分は傷ついた。人に伝える時に、佼成会が伝統仏教と違うことや、開祖さまの写真があることでひっかかっていた」、「写真があると、人間を神のようにあがめる、怖いインチキ宗教にみえる。今は開祖さまがすばらしいことがわかるが、写真があるために(インチキ宗教と)間違わせてしまったら申し訳ない」、「(宝前の)仏の横に写真があるということ、仏の教えではなく、この人達を敬うのかなあと錯覚させる。今ではあってもよいと思うが、新しい人を連れて来た時、誤解させる」、「写真があることに以前違和感があったが、信仰が深まるにつれてそれはなくなった。しかし、新しい人を連れて来ると、伝統仏教の人からはなぜ写真があるのかと言われたので、ないほうがよい」。

このように、宝前の左右にある写真は、「日本の宗教」ということ以外にも、個人崇拜を奨励するあやしい宗教のようにみせてしまうようだ。

(2) 黒の礼服への違和感

韓国の伝統仏教には尼僧も大勢いるが、法衣はグレーである。佼成会では導師、脇導師はもとより式典の時に主だった人は、日本式の黒の礼服を着る。これにも違和感がある(写真17参照)。



写真17 式典での導師，協導師の退場の様子
黒の礼服を着，おたすきをかけ，所作には作法がある

「違和感があるのは、お役での式典の作法。歩き方、作法の仕方、厳しくてしぼられている。また、黒い服にも違和感がある」、「佼成会に最初来た時、家庭的な温かみを感じた。しかし、黒服を着て、ご供養するのを見て怖かった」、「伝統仏教ではグレーの服なのに、佼成会では黒の服。服をグレーの韓国式に変えてほしいと思う。儀式儀礼の時に、韓国の尼僧の衣を着たほうがよい。よく来る会員は見慣れているのでよいが、新しい人を導く時、違和感がある」⁽⁹⁾。

(3) その他の違和感

「ご供養や式典のあとに、『仏様、開祖様、會長先生、ありがとうございます』と言うのは慣れなかった」、「ご宝前の飯水茶の茶碗は韓国的ではない」。

金支部長は「おたすきはみんな最初おかしい

と思ったと思う。南無妙法蓮華經の意味を説明し、私たちは在家だから、衣を着ることができないが、おたすきは、その代わりのものであるという説明をする」と言う。

2 韓国の伝統仏教と佼成会の違い

ところで、佼成会も仏教系の宗教であるが、伝統仏教との違いはどこにあると信者はみているのであろうか。

(1) 伝統仏教と佼成会の相違点

「儀礼が違う。韓国の仏教は五体投地をして祈る。佼成会では数珠を持って読経供養をする（写真18、19参照）」、「伝統仏教では一〇八回の五体投地をする。お坊さんの説法をビデオで見るところもある。お坊さんが信者のところに行くこともあるが、法座や『むすび』はない。佼成会のようにドロドロのところまで人前で出すことはない」、「伝統仏教では（信仰深い人で）月に一日と一五日にしか行かない。普通の人は花祭りの提灯をあげるくらいだ。生活仏教化したお寺ではひんばんに行く場合もあるが、佼成会のように毎日のように道場に出ることはない」、「佼成会で（道場）当番にあたった時は、午前八時三〇分から午後三時まで道場に出る。佼成会に毎日出ることを（家族に）理解させることが大変だ¹⁰」、「伝統仏教では、午前四時三〇分、午前一〇時、午後六時に祈りがある。それにあわせて行ってお祈りをする。お坊さんのお話は毎日はない。伝統仏教では昼食の用意をするのは専門の人がいて、その下で信者が作るのをする」、「伝統仏教では、一生懸命する人以外はご宝前に近づけない」、「お寺ではお金を出せば、（祈願儀礼を）お坊さんがやってくれる。佼成会では自分でやらなければなら



写真18 ソウル市内の曹溪宗の寺で五体投地して祈願する人々
仏像はキラキラした金色である



写真19 道場での読経供養



写真20 命日のあとの法座

教会長、支部長を中心に3つの輪ができている

いので大変」、「伝統仏教では、坊さんに頼み、祈祷代をわたす。名と生年月日を言う」。

佼成会に入って驚いたことは何かという問いにも「人にやってもらうのではなく、自分でやるということへの違和感」が述べられている。ある新入会員は、「自分でやるというのは驚くより、大変だ」と語る。「お坊さんにお願いで、祈祷してもらおうというのではなく、自分で祈願供養をし、法座に座る」という、自らが行じることが驚きなのである（写真20参照）。

「佼成会では、みんなが心配りをしてくれて、自分の心を汲み取ってくれる。相手の気持を配慮し、寄り添う。ほかのお寺ではこのようなことはない。ミスにしてもミスをかかえてくれるのではなく、悪い噂になる」、「組長、主任、支部長の仏性礼拝する姿、言葉づかい。法座に座った時、離婚問題の話が出た。そんな話をす

るのですか、と言ったら、あなたも法座に座ったら出てくると言われた」。カトリックの人で、入会したばかりの会員は「光州からソウルに嫁に来た。娘が洗礼を受けると言うことで、自分もカトリックに入った。実家の母もカトリックだ。自分は夢を見ると夢のとおりになる。勘が鋭い。それを誰かに言いたいのが、寺に行っても言えない。ソウルに引越したら知っている人もいない。法華經の勉強をする所ということで佼成会に来た。日本のおいがある。韓国の寺ではない。日本の寺だ。人前で問題をさらけだすことはできない。いつかは心を開いてできる時が来るかもしれない」と述べている。

儀礼の違いのほか、佼成会では頻繁に道場に足を運ぶこと、伝統仏教では僧が法話をするが、佼成会では上位の人の話ばかりではなく、自分の問題を赤裸々に出す法座があること、自らが儀式儀礼を行なうことなどが言及されている。

(2) 佼成会の教会長と韓国の僧侶との違い

それでは、教会長と伝統仏教の僧との違いをどのようにみているのだろうか。「教会長さんは自ら生活実践している。伝統仏教のお坊さんは上のほうから言うが、佼成会は生活実践だ」、「同じ仏の教えなので、お坊さんも教会長さんも同じ。お坊さんは生活実践がないから、心の近くに入らない。実践で人を感化するのが違う。お坊さんは押んだり、距離感がある。教会長さんはお母さんみたい」、「お坊さんの話は形容詞(きれいな話)、教会長さんの話は聞いてすぐ動ける、生きていく法門だ」、「お坊さん、牧師さんの話はいい話だまで終わる。自分のものにはならない。佼成会は自分のものになる。どう実践するかを教えてください」、「最初はなぜあんなことまで、

教会長さんが人の前で言うのかとおかしかった。すべてが自分だということは納得した」。

伝統仏教の僧侶に比べて、佼成会の教会長は身近な存在で、かつ具体的な生活実践とむすびついた指導が行われていることがわかる。しかしながら、他方、教会長の指導は日本式（日本の佼成会式）である。それは初めから受け入れられたものでもなかった。

3 指導における違和感

「伝統仏教と比べて佼成会で言われることには違和感があった。今はその理由がわかるけれど、素直になりなさい、ハイと言いなさい、言い訳をするなど言われ、共産党かと思った。子どもの教育で、何で逆らうのか、素直になりなさいとは言いが、（韓国では）ほかの場面で素直になりなさいという言葉は使わない。信仰の中で、素直になりなさい、ということに慣れていなかった。伝統仏教では、心を無にしなさいとは言いが、素直になりなさいはない。私はしばらく活動を休んだあと、二〇〇六年一〇月に主任というお役で戻ってきた。苦労した。戒律を守らなくてはならない。道場に足を運ばないといけない。適当にできることも適当にできない。後ろ姿（自分の行動やあり方）が下のラインの人や導きの子に影響する」。

「佼成会では時間がきちんとしている。また報告をしなさいと言われる。私の場合、今でも難しいのが報告だ。報告が徹底的にできない。家庭の中では一番上でリーダーなので、上の人に報告するということはやっていないので、充分やれていない」。

「わかりにくかったことは、『報告』だ。ある人を悪く伝えなければならぬこともある。あまりにガラスばり

だ。プライバイシーの問題もあるのに、報告しなくてはいけないのか。そこに手どりに行ってきましたという報告はいいが、この人はこう言っていましたというようなものは、最初はおかしかった（違和感があった）。日本の民族性と韓国は違う。報告というより悪口を伝えるような感じだった」。

二人の支部長はこの点について次のように述べている。

「報告・連絡・相談というホウレンソウを知らないで生きてきた。支部長のお役のおかげで、下の人が連絡してくれないと心配なことが体験としてわかった。韓国では『報告』の習慣はない。無事着きました、これから行きますと言っこともしない」。

「報告、『お通し』をやるようにさせるのが難しい。我が強く、なかなかやらない人もいる。人の姿を見て、自分たちの修行として取り組む。また、佼成会の組織は、会長―支部長―主任―組長といったラインの組織だが、家庭の主婦はこうした組織活動に慣れていない。みんな勝手にやりたいところがある。このラインがはっきりわかれば、先輩、主人、親を立てるのもわかってくる」。

いずれにせよ「連絡」には慣れない人は多いが、時間にきっちりすることは、存外よい効果をあげている。「時間が正確なのはよい。リズムがはつきりする。時間を細かく分けて使うので、充実に使える。やっているうちにだんだんとできるようになる。きっちりやったおかげで、家の中がきっちりと整ってくる」のである。

4 総戒名の祀りこみ

(1) 総戒名の祀りこみへの抵抗

双系の先祖観の受容いかにかわらず、総戒名の自宅への祀りこみには、大変抵抗があることは先述した。総戒名は、幹部である班長以上は自宅に祀りこんでいる。しかし、彼女たちもすんなり祀りこんだのではなく、初めは周囲の目を気にしたり、反対されたりしている。

「最初、抵抗があった。戒名室に祀るのはよいが、家に祀るのはいやだった」、「家に何か祀る習慣は韓国にはない。仏像を祀ることもしないし、置物としても置かない。お坊さんからもシン入れていない仏像を変に祀ったら、変なもの（霊）が入るのでいけないと言われる」。このように韓国では家の中に何かを祀る習慣がない。また、祀りこみをしたあとも周囲から反対されたり、人目を気にしている。

「友達が来て、何であんなものをムードンみたいにあげるの？ と言われたことがある。周りにそう言われるのがいやで、負担になったことがある。友達やクリスチャンの親戚が来ると、飯水茶をとり、鉦をしまう」、「家には総戒名と本尊を祀っているの、それは何かと聞く人もいる。誰か来ると聞かれるので、それが一番いやだった」、「総戒名を祀った時、伯母が家に遊びに来ていて、すごく怒られた。家の中にゴタゴタがなくなるように祀っていたのに、鬼神を祀って何がいいんだと言われた。その後、嫁姑関係がよくなったので、認めてくれた。親孝行する姿を見て、認めてくれるようになった。総戒名があるので、自分も感情をコントロールした」。

総戒名を祀りこんだら、ゴタゴタがなくなり、家の中が整うという言い方がされているようである。「方便で、

祀ったら家の中が整うと言われた。ある家の追善供養に行った時、すばらしいと思った。それでやってみたくて思っただけだ」。

このように、総戒名の必要性は理解するようになって、自宅に祀ることは大変な抵抗があることがわかる。

(2) 双系の先祖

総戒名には夫方妻方双方の先祖を記載するが、双系の先祖供養については親世代からの疑問が呈された。

「夫の親からは、なぜ嫁の先祖までもってきてやるのかと言われた。総戒名を祀る前は親の実家の苗字（本貫）がわからないくらい、実家に対しては関心がなかった。嫁に行ったら夫方だけ。校成会に入会して両家の先祖供養をするということがわかった」、「私の父は儒教の教えを徹底していたが、校成会のおかげで両家を祀ることは本当のことだと納得した。自分は儒教をやっているけれど、いいことだと認めてくれた」。

(3) 追善供養・総供養

追善供養、総供養は、総戒名を祀りこんでいる家では自宅で、そうでない場合は戒名室で行う。悩みの相談にのっているうちに、先祖が成仏していないのがわかる。昔の現象を見て、「先祖にそういう人がいないですか」と幹部は信者に尋ねたりする。「過去帳に載せるために、先祖を調べた時、いろいろな先祖がいることがわかった」りする。「父の本妻が亡くなって追善供養したら、教会長さんが調和を得ずに亡くなった寂しい人がいると言った。自分もそうだった。家族の中で調和をとっていかねばならない」と気づいたりする。総戒名の自



写真21 リフォームして新しくなった教会道場の外観

宅への祀りこみには抵抗があるが、総戒名を戒名室に祀りこんだ時には、まずは三代前までの先祖の総供養をし、特定の個人に関しては追善供養を行うが、これらに対しては、それほど抵抗はないようである。つまり、韓国佼成会にとって、一番のネックになっているのは、総戒名の「自宅への祀りこみ」であるということがわかる。

5 道場リフォーム後の変化

ところで、教会道場は二〇〇六年六月から約九ヶ月をかけてリフォームした。以前の道場と比べて、いくつかの変更点がある。儀式儀礼にかかわることでは、宝前にあった開祖、脇祖の写真を戒名室に移した。白木の仏像から金色の仏像になった。命日を日本に準じて、一日、四日、一〇日、一五日（二八日は幹部会議）に変更した。建物の構造としては、エレベーターをつけた。昼食を食べる場所を地下か

ら最上階の四階の明るい場所に移した、ということがある。また、リフォーム中に宝前をマンションの一室に移したが、狭いため、参拝者に昼食を準備して出すことはせず、弁当持参とした。ここでは、写真の移動、仏像の色の変更、命日の変更、弁当持参の定着の四点について、信者の意見をみていきたい。

(1) 宝前の開祖、脇祖の写真の戒名室への移動

年配の女性の一人は、「〇〇宝前の横にあったほうがよかった。あればすぐ挨拶できる。報告やお願いができる」と述べた人がいたが、ほかの人は総じて「新しい人を連れて来ると、伝統仏教の人からはなぜ写真があるのかと言われるので、ないほうがよい」という考え方である。信仰が深まるにつれ、違和感は減少するが、布教のためには写真は宝前に掲げないほうがよいと、戒名室への移動は肯定的である。

(2) 大本尊（仏像）の色の変更

教会の大本尊の仏像はリフォーム中に日本に送り、自然な木の色をいかした仏像から、金色の仏像に色を変えた。個人に与えられる本尊はブロンズ色と金色があり、アジア圏では文化的に金色が好まれるので金色の本尊が下付されていた。韓国教会の大本尊は金色ではなかったので、この機会に色を変えたのである。

「華麗になったし、仏が明るくなつてよい」、「以前の大御本尊の木の感じを生かした色彩は、自然で純粋な印象を受けた。今回金色の色をつけたので、光がそそがれるようで、自分の心も光にあふれる。伝統仏教の仏像はもっとピカピカだが、佼成会のはやさしく上品な感じ。伝統仏教の仏像のキンキラキンの色とは違うのは佼成会

の教えではないか。つまり、理想と現実のあいまいさを表すのにちょうどいい。佼成会本部で選んだいい色ではないかと思う。自分たちも一段階大人になった感じがする。自分としてはキンキラの仏は願っていなかったが、色が変わってうれしい」と支部長が述べている。宝前左右に掲げられた開祖・脇祖の写真のように拒否感はないが、金色でない仏は異国の仏を表していた。

(3) 命日の変更

二〇〇七年三月から、教会命日は一日（初命日）、四日（開祖命日）、一〇日（脇祖命日）、一五日（釈迦牟尼命日）に日本の佼成会に準じて変更された。二八日は幹部会議の日とした。これまでは一八日（薬王菩薩命日）、二八日（教会命日）があったが、日数が少なくなり、かつ月の前半に集中するようになった。これについては、「二五日から月末までが長い。教会に来る人は来るが、普段来ない人はご命日が少なくなって来なくなる」という考え方が大勢を占める。

「ご命日が月の後半にないことは、支部ごとの会議を行ったり、全面的に手どりをする時期としてよいこともある」と述べる人も中にはいるが、これは教会のリフォーム中に、仮道場が狭かったので、外に出て、手どり（会員の世話）に力を入れたことが、このような発言につながっているといえよう。手どりの内容は、個人宅での追善供養、総供養、足が悪くて出てくることができない人の家への訪問、開祖生誕一〇〇年の日本への団参のための手どりなどであった。¹¹⁾

(4) 昼食用の弁当持参の定着

韓国の伝統仏教では、参拝者に昼食を出す。佼成会でもそれに準じて、道場当番が毎日数十人分の昼食を作っていた。昼食を出さないと来ないのでは、と言われるほど、昼食を出すことは仏教寺院の慣習として根づいたものであった。リフォーム中の臨時道場が狭かったので、弁当持参となったが、道場が新しくなってもそれが継続されたことは画期的なことだった。道場当番のうちの昼食担当者は、供養のあとの法座に出ることもできず、昼食の準備をしなければならなかった。それでは弁当持参についての発言をみてみよう。インタビュをしたほとんどは幹部だったので、新入会員を道場に連れて来た時に昼食を出さないことについての対応と、昼食を弁当化することで楽になったということへの言及がある。

「臨時道場で弁当になり、あのような環境（狭い）なので弁当なのかと思ったが、今新しい道場になってからも弁当を持ってきている。（道場に参拝する時には）一〇〇〇ウォン（約一〇〇円）お布施をして、修行をしながら昼食をいただいて申し訳ないという気持ちは前からあったが、未会員の人から、なぜ弁当を持って行くのか、寺がご飯をくれる（昼食を出す）のは当然なのにと言われた。その時に自分が言ったのは、（一〇〇〇ウォンよりも昼食代のほうが高いので）仏さまに迷惑をかけて、世話してもらうのではないかと言ったら相手が納得した」。

「家が遠く、子どもが小さいので、弁当を作って持って行くのは不満タラタラだった。しかし、支部長の話を聞くと、（道場）当番が食事の準備をすると、ご供養にも出ることができないし、法座にも座れない。当番が昼食の準備のためにほかの修行ができないということになるほどなと思った」。



写真22 新しくなった道場の4階で、弁当持参で昼食をとる

もつとも、弁当持参といってもキムチと味噌汁は教会から出す。当番が味噌汁を作るが、前日に野菜を切つてあるので、味噌汁の準備は二〇分で終わる。以前はおかずも作るので二、三時間かかった。「伝統仏教のお寺では、ナムルと味噌汁くらいで、そのご飯代をとるお寺もある。以前、佼成会で出していたものは伝統仏教より高級だった」という。

昼食が出ないので新しい人を連れて来にくいのかという問いには、「キムチと味噌汁は教会で出してくれるし、ご宝前からおろしたご飯もある。新しい人にお弁当のことは伝えられないので、その人の分までよけいに作って持って来る人もいる。ラーメンもストックがあるからラーメンをつくったりもする」。

「弁当は家で作って持ってくる。たまにはキムパフ(韓国式のり巻)を買って持って来る人もいるが、ほとんど手作り。そうすると朝起きるのが早くな

り、家庭でこうしてああしてと言われても積極的にパッパと行動ができる。山に行くから弁当を作って、と言われたら、ぱっと弁当が出来る。日頃弁当を作って教会に来て「から」という。サラリーマンの夫に弁当を持たせることは今は一般的ではなく、子どもは学校で食べるので、弁当を作ることは家庭ではほとんどない。

弁当が定着した理由は、昼食を作る当番の負担が軽減されたことである。「個人個人が弁当を持って来るので、全体的にこしらえたり、お茶碗を洗ったりしないので楽」であり、「もう前みたいに当番で作る気はあるか」という問いには「もうできない」とみなが笑いながら答えていた。個人個人が弁当を持って来て、新しくなった教会の最上階で見晴らしのよい部屋で、おかずを分け合いながら食べている（写真22参照）。

「道場当番の回数は以前と変わらないが、お昼の食事を作らなくてよい分、ご供養に入れるし、法座に充実して座れる。修行ができるようになった」のである。

このように、昼食を出すという伝統仏教の寺の習慣は変えることができなかつたかと思つたが、リフォームを機に、弁当持参で昼食の準備に時間をとられなくなり、供養をする、法座に座るといふ本来の修行の場としてのありようが強化された。

以上、みてきたように、教会のリフォームのために長期にわたって、教会道場が使用できなかったことを契機として、新道場では、開祖・脇祖の写真の戒名室への移動、本尊の金色への塗り替えによつて外見上の日本色を薄め、韓国の事情に即した変更が行われた。しかしまた、伝統仏教の習慣である寺で参拝者に昼食を出すことは、弁当持参が当番の負担軽減になることを幹部たちが実感として感じたため、味噌汁、キムチだけに簡略化され、

修行道場としての内実に合うかたちには、伝統仏教方式から脱することができた。反面、命日の日にちを日本の本部に合わせたことで前半にかたより、一般信者にとっては道場に足を運ぶ回数を減少させた。韓国佼成会では青年部を除き、ヨコの組織である部の活動が多く行われているわけではないので、これがプラスに働くか、マイナスに働くかは今後をみなくてはならない。

おわりに

韓国佼成会においては、日本発の宗教が韓国という異文化で展開していく際、反日感情の存在ゆえに意識的に日本的な部分を稀釈し、さらに現地の伝統仏教の様式を採用することで、文化的異質性を軽減しようとしてきた。(とはいえ、筆者がみる限りにおいては、韓国佼成会はかなり日本的な雰囲気をかもしだしている。) また、これまで検討してきたように、日本では入会の基本条件である総戒名の祀りこみが、韓国においては非常に抵抗があることがわかった。こうした根幹にかかわることは、総戒名の戒名室への安置というかたちで、状況適合的に工夫して対応した。異文化布教の課題を考えるにあたって、韓国の場合、通常の課題以外に、反日感情の存在という特別の課題があり、また、隣国として共通の文化的背景があるやにもみえるが、総戒名の祀りこみへの抵抗をはじめとして、慣習もずいぶん異なることがわかった。しかしながら、韓国佼成会は日本の佼成会の教えや儀礼の根幹にかかわることは守りつつ、現地の事情に合った工夫をしている。これには日本、韓国の両国の文化を理解し、言葉の壁も越えた李福順、李幸子の存在があればこそ、現地信者のニーズや感情を汲みあげていると思わ

れる。

本稿では、儀礼や儀式の部分における異文化布教の適応課題について考察した。現地信者の信仰受容や定着にかかわる課題については、稿をあらためたいと思っている。

注

- (1) ブラジルにおける日系新宗教運動の課題として、筆者はⅠ拡大課題群、Ⅱ適応課題群、Ⅲ定着課題群、Ⅳ組織課題群を挙げた。詳しくは、渡辺二〇〇一、八一―一二頁を参照のこと。本稿では適応課題群にかかわるものを扱っている。
- (2) 守護神勧請のためには、本尊を勧請した導きの子が五家以上ないといけないが、この条件にあてはまってもすべてが勧請するわけではなく、韓国佼成会で守護神を勧請したのは、李家(教会長宅)以外に三家だけである。いずれも親戚に佼成会幹部の在日韓国人がおり、日本式、神道形式のものに抵抗がない家である。
- (3) 伝統仏教の場合は、提灯をつるす場所(外の境内から堂内)によって布施の金額はピンからキリまでである。伝統仏教の寺では、花祭りの時の提灯の布施収入が一年分の運営費になるくらいである。
- (4) 提灯の材料は仏具屋で売っているので、手作りする。花の下にお札をぶら下げ、お供えした人の名前を書く。生きている人の場合は色のある提灯で、亡くなった人の場合は白の提灯である。佼成会では提灯は一つ三万ウォン(約三〇〇〇円)で、翌年の花祭りまで一年間つるす。提灯は一五〇〇個奉納され、みな会員からである。佼成会では提灯の布施は運営費の一部となる。
- (5) 韓国の主な仏教宗派には、曹溪宗(三九・〇%)、太古宗(三一・〇%)、天台宗(八・〇%)、法華宗(五・六%)、綜和宗(五・一%)、一乗宗(〇・九%)、がある(カッコ内は信徒総数比、一九八三年)。太古宗のみ、妻帯を認めている。最大宗派の曹

韓国立正佼成会にみる日本的要素の持続と変容

韓国立正佼成会にみる日本的要素の持続と変容

- 溪宗を例にとると、①伝統的戒律に立脚して結婚をせず、僧侶は文字通り親の下を辞して仏門に参じた人々である（出家）。②寺院は地域社会に根ざした檀家制度をもたず、葬礼にかかわる菩提寺の機能をもっていない（茶毘が李朝以来の人々の習慣にそぐわないこともあって、仏教はほとんど葬送に関与していない）。③人々が招福除災・来世往生を祈願することに変わりがないが、それは何よりも日々の生活局面で展開される日常の信仰である。④人々は足繁く寺に通い、大雄殿（仏殿）に跪拝する。⑤休日ともなれば、終日、人々は仏殿や境内に集まって、近しい僧侶を訪ねる。勿論、個人の供養は宗教に関係なく、盛大に行われる。⑥寺院は信徒の寄進を主財源としている。僧侶が労働にたずさわることはない。寺には僧侶以外に日常のことをする独身信徒（多くは女性）数人が起居している。⑦仏教は中高年、女性層に支持されてきた伝統がある。「金一九八五・一九六一―二〇一」
- (6) 不遷位とは、李朝時代とくに功績のあつた臣下や学者に対し、王から永代祭祀を認められたものをいう。「伊藤一九八五・一一五」
- (7) 族譜には、始祖以下判明しうる父系子孫の名（字・号・諡を含む）、生年月日、官位、事蹟、没年月日、墓の位置、妻の父や官職のある祖先の貫姓や官位、妻の墓の位置などが整然と記されている。なお、女性は既婚者のみ、その夫の貫姓と息子の名、娘の数が記されている。したがって女性本人の名はどこにも書かれていない。族譜はほぼ一世代ごとに改訂版が出される。「伊藤一九八五・一一五」
- (8) 伝統仏教では写真を宝前に飾ることはない。ただし円仏教では宝前に向かって右の横の壁に創設者の写真を掲げている。円仏教は一九一六年に朴重彬によって創立された宗教で、「○」と象徴される法身仏一円相を信仰対象としている。教化、教育、慈善の三大事業を積極的に推進している。
- (9) 教会長の李福順は黒い礼服について、「いくら隠しても日本からの宗教であることがわかるなら、ザック balan に出したほうがよい。グレーの韓国式の服に変えても、妙俊先生の写真に着物をやめて洋服を着せたようなものだ」と述べている。
- (10) 教会は六のつく日と日曜日（命日にあつた場合は開ける）は基本的に休みであるが、それ以外は毎日開いている。教会が開いている日は、三支部が分担して道場当番を担当する。したがって、毎月およそ七日間は自分が所属する支部の当番となる。宝前の「お役」が三人、戒名室の当番が一人、放送の「お役」が一人に支部長である。宝前の「お役」とは、宝前を

整えて、飯水茶の給仕をし、花をきれいに整え、朝一〇時に始まる供養で、導師（主任クラス）と脇導師（二人、組長または班長）をする役である。導師、脇導師は交代交代で行う。自分の支部が担当の場合は、支部会員は応援に出る。午後は戒名室での総戒名の祀りこみと安置のほか、総供養、追善供養、水子供養などが毎日一件か二件ある。

(11) リフォーム中に、教会道場という場がなくなって、足が遠のく人も相当数出た。また、三支部あったが、支部長の力量が明白になったという結果も生んだ。

参考文献

朝倉敏夫、一九八九 a、「韓国の祖先祭祀と社会組織」、渡邊欣雄編『祖先祭祀』凱風社、四一―六四頁。

朝倉敏夫、一九八九 b、「韓国の位牌祭祀」、渡邊欣雄編『祖先祭祀』凱風社、一一―一四三頁。

飯田剛史、二〇〇〇、「宗教的伝統とキリスト教の発展——韓日比較の視点より」、小林孝行編『変貌する現代韓国社会』世界思想社、一四一―一六二頁。

伊藤亜人編、一九八五、『もつと知りたい韓国』弘文堂。

伊藤亜人、一九九六、『アジア読本 韓国』河出書房新社。

川上新二、一九九八、「韓国の巫俗儀礼において祀られる祖先」、駒沢大学『宗教学論集』二〇号、八一―九六頁。

川上新二、二〇〇五、「韓国における仏教と祖先崇拜に関する一考察」、駒沢大学『文化』二三号、四三―六四頁。

金煥泰（沖本克己監訳）、一九八五、『韓国仏教史』禅文化研究所。

崔吉城、一九八四、『韓国のシャーマニズム——社会人類学的考察』弘文堂。

崔吉城（重松真由美訳）、一九九二、『韓国の祖先崇拜』御茶の水書房。

崔吉城、一九九七、『韓国の儒教と巫俗における喪と死穢』、孝本貢ほか編『家族と死者祭祀』早稲田大学出版部、一六一―一八八頁。

崔吉城、二〇〇四、『韓国における祖先崇拜の歴史と現状——男児選好の問題を中心に』、池上良正ほか編『岩波講座 宗教 第

韓国立正佼成会にみる日本的要素の持続と変容

六卷 絆」岩波書店。

佐々木典子、二〇〇〇、「現代家族の変動」、小林孝行編『変貌する現代韓国社会』世界思想社、二五—四三頁。

曹恩、一九八八、「産業化と新家父長制——女性の適応と葛藤」、韓国社会学会編（小林孝行訳）『現代韓国社会学——韓国社会、どこへ向かっているのか』新泉社、一八二—二〇〇頁。

李元範ほか、二〇〇五、「韓日宗教の相互受容実態に関する調査——韓国に進出している日本新宗教の実態——」（テーマセッシヨン2）、『宗教と社会』一一号、一八五—二〇四頁。

渡辺雅子、二〇〇一、『ブラジル日系新宗教の展開——異文化布教の課題と実践』東信堂。

渡辺雅子、二〇〇五、「韓国における立正佼成会の展開過程——日本宗教であることの困難と在日韓国人による現地韓国人布教」、『明治学院大学 社会学・社会福祉学研究』一一九号、三五—一〇〇頁。

付記

韓国立正佼成会の会長李福順氏、総務部長李幸子氏、支部長金美慶氏、文書部長兼支部長成淑姫氏をはじめとして、聞き取りに応じてくださった方々に感謝の意を表するものである。

本稿は、二〇〇八年度明治学院大学社会学部付属研究所一般プロジェクト「日本宗教の異文化布教に関する社会学的研究」（研究代表者渡辺雅子）による研究成果の一部である。